

*Prapañcahṛdaya* 試論

——匿名作品の歴史的位罫付け——

金 沢 篤

- I はじめに
- II *Prapañcahṛdaya* という作品
- III *Prapañcahṛdaya* の引用句及び制作年代

## I はじめに

*Prapañcahṛdaya* (PH) とは、Theodor Aufrecht が “a cyclopedia of modern works of science”<sup>1)</sup>と紹介しているところのものである。この PH は生憎匿名作品であり、制作年代を確定し難いにも拘らず、歴史を再構成する為の信頼し得る資料に乏しいインド学研究にあって屢々重宝されてきた<sup>2)</sup>。いや、それどころか、例えば *Mīmāṃsā* の歴史的な研究にあって、これまで最も多用されてきた文献とまで言えるかもしれない。だが、その概説書的な内容とも相俟って、著者名が判っている他の多くの思想書や文学作品のように、作品全体が問題とされるということは全くといってなかった。これまで、PH が一つの纏まった作品として近・現代の学者達の関心を引いた例しかなかったのである。この種の「便利な書物」が作品として軽視されるのは世の常であろう。歴史を遡ってみても PH が他の著作中に、その名前と共に言及・引用されることもなかったようである。従ってその書物が、何時？、誰によって？、どういう目的で？ 著わされたかを明らかにしようと願う者にとっては、他の誰かの直接の証言を当てにするこ

1) CC, ii, p.75, 左 1.21.

2) V. A. Ramaswami Sastri, “A short history of the Pūrva Mīmāṃsā Śāstra”, (*Tattvabindu by Vācaspatimiśra with Tattvavibhāvanā by Ṛṣiputra Paramaśvara*, Annamalai, 1936) 等の *Mīmāṃsā* 関係の研究書及び論文, V. Raghavan, *Bhoja’s Śṛṅgāra Prakāśa*, Madras, 1963, Michael Witzel, “Materialien zu den vedischen Schulen: I. Über die Caraka-Śākhā”, SII, Heft 8/9, 1982, pp. 171-240 等。

とは出来ず、先ずは専らその書物の内部を丹念に漁る他手段がないことになる。だが、やはり匿名であることが決定的である。数多くの引用句と無味乾燥な型通りの記述よりなるその小著が伝える事実(?)に関心が寄せられることはあっても、これまでその書物を研究しようとする者はなかった(事実、PH という書名を題名のうちに持つ研究が発表されたことはなかったのではなからうか)。ただ、強いて言えば、その書もたらす貴重な証言の価値を定める為の最低限の拠所、つまり制作年代だけは問題とされている。その制作年代の推定(即ち、上限と下限の幅の絞り込み)の為には、その書が誰に(or 何に)言及し、誰に(or 何に)言及していないか(即ち、言及されている人物名と作品名、引用句等)が検討されればよかったわけである。そうした作業は厳密に遂行するとすれば周知の通りかなりやっかいなものであるが、幸いなことに手短に済ますことが出来たようである。その結果、今では大体 AD. 11 世紀頃の作品と考えられている。そしてこの種の匿名作品は、一度び年代が与えられてしまうと、先ずよほどのことがない限り、修正されることがないのが常である。こうした PH を廻る諸事情を踏まえた上で、筆者は、作品としてはマイナーなこの書の成立の事情を訊ね、制作年代推定の経緯を改めて検討し、その制作年代が明らかになることによって如何なる事態が将来するかということなどについても若干の考察を加えてみたい。それにしても正に“Enzyklopädie”<sup>4)</sup>と呼ぶに相応しいこの書物において、複数でもあったかも知れない著者の個性は一体どこに発揮されたのだろうか。それとも、彼、若しくは彼等は全く見事に冷静な時代の証人たり得たのか。今日それが伝える事実(?)を、我々が研究の中でよりうまく活用し得るためにもそれは不可欠の作業であると思われるのである。それに当たっては、先ずはこの知る人ぞ知る知らない人は全く知らない PH の内容を概観し、次いでこの書物の根幹をなし、しかもその成立の文化的背景を明かすものと思われる種々著作からの引用句について検討を進めることになるだろう。

## II *Prapañcahṛdaya* という作品

本稿で取扱われる PH とは唯一つの刊本たる、以下のものである。

T. Gaṇapati Sāstrī, ed., *The Prapañcahṛdaya*, Trivandrum Sanskrit Series No. XLV, Trivandrum, 1915.

3) M. Witzel, *op. cit.*, p. 212, 1. 15.

編者 T. Gaṇapati Sāstrī による簡単な Preface (& Nivedanā)<sup>4)</sup> が冒頭におかれている。校訂に際して用いた 5 種類の写本に就いての説明の他、全 8 章 (prakaraṇa) 中の第 6 章の名称に就いてのコメントが付されている。さらに “It is hoped that this book will be found useful by those desirous of acquiring a general knowledge of the various departments of knowledge found in Sanskrit. It is a pity that the name of the author is not found in any of the manuscripts.” との記述は、本稿冒頭に引いた Aufrecht の言を裏付けるものであり、PH に対する格好の紹介文になっている。

PH は全体が 8 章 (prakaraṇa) からなっている。

- |                          |                           |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. Tanubhuvana-prakaraṇa | pp. 1-18.                 |
| 2. Veda-prakaraṇa        | pp. 18-25.                |
| 3. Śaḍaṅga-prakaraṇa     | pp. 25-38.                |
| 4. Upāṅga-prakaraṇa      | pp. 38-50.                |
| 5. Upaveda-prakaraṇa     | pp. 50-59.                |
| 6. Śaḍvarga-prakaraṇa    | pp. 60-69.                |
| 7. Jñāna-prakaraṇa       | pp. 69-84.                |
| 8. Yoga-prakaraṇa        | pp. 84-121. <sup>5)</sup> |

先に触れた T. G. Sāstrī のコメントとは、「第 6 章の章名はその内容からいえば、Śaḍvarga-prakaraṇa よりはむしろ Aṣṭavarga-prakaraṇa とした方が相応しい。だが、Aṣṭavarga-prakaraṇa ではなく Śaḍvarga-prakaraṇa となっていることも納得出来る」<sup>6)</sup> とのものである。

この 8 章は、全て等価なものとして連続しているのではなく、さらに大きくは三つの部分に分けられる。それを明確にする為にも、著者自身による PH 述作の目的等を窺って見よう。冒頭は以下の通りである。

i) śriḥ // prapañcahṛdayam / tanubhuvanaprakaraṇam /  
lokadehādikāryāṅam kāraṇasyādikāraṇam /  
prapañcahṛdayādhāraṃ taṃ namāmi sadā harim //  
athedānim aśeṣapuruṣārthaśeṣatayā sakalaḥ prapañco 'yam iha

4) 同内容の「前書」が英・梵語でそれぞれ一頁ずつ付されている。以下の引用はそこからのもの。

5) Cf. PH, Viśayasūci.

6) Cf. PH, Preface.

pradarśyate / sa tu trividho vedyavidyāvettrprapañcabhedena / ta-  
tra vedyaprapaṅco 'pi punar dvividhas tanubhuvanabhedena / (PH,  
p. 1, ll. 1-8)

1) シュリー。『プラパンチャ・フリダヤ』。「身体・場所-章」。

「世界・身体等の諸々の結果をもたらす原因にとっての、始源の原因にし  
て、(本書)『プラパンチャ・フリダヤ』の基体たる、かのハリに常に私は  
帰命する。」

さて今、全ての民の理想に資するものとして、この一切のプラパンチャが  
ここで、説示される。しかるに、そ(のプランチャ)は、知識対象 (vedya)・  
知識 (vidyā)・知識主体 (vettr) というプラパンチャの別によって三種で  
ある。そのうちの、知識対象-プラパンチャも、やはり、身体 (tanu)・場所  
(bhuvana) の別によって二種である。

なお第2章、第7章の冒頭には、それぞれこうある。

ii) atha vedaprakaraṇam /

athedānīm asmin dehe vidyāprapaṅco 'piha pradarśyate, (PH, p.  
18, ll. 5-6)

2) さて、「ヴェーダ-章」。

さて今、この身体 (deha) に於ける、知識-プラパンチャも、ここで説示  
される。

iii) atha jñānaprakaraṇam /

athedānīm asya prapañcasya vettrrūpaṃ pradarśyate / etad yat  
kathitaṃ vedyarūpaṃ, tat sarvaṃ kṣetram ity ucyate / etad yo  
vetti, sa kṣetrajñaḥ / (PH, p. 69, ll. 11-14)

3) さて、「知識-章」。

さて今、このプラパンチャに対して、知識主体という (プラパンチャ) が  
説示される。なお、知識対象という (プラパンチャ) が語られたが、その全  
ては、クシェートラ (kṣetra:田) と言われる。それを知るところの者が、田  
知者 (kṣetrajña) である。

また、第8章の冒頭と末尾 (即ち、PH 全篇の末尾) には以下の如くある。

iv) atha yogaprakaraṇam /

athedānīm yogadharmo 'pi samāsarūpeṇa kathyate / (PH, p. 84,

## II. 17-18)

4) さて, 「ヨーガ-章」。

さて今, ヨーガ・ダルマも, 複合語の形で, 語られる。

v) nānāvijñānanamaṃ vidvajjanamanoharam /

prapañcahṛdayākhyam hi prapañcōttamabhūṣaṇam //

samyagjñānapradam śāśvadajñānāṃ sarvavastuṣu /

aprakāśyam idaṃ tantraṃ saṃsāraṇadāhakaṃ //

iti prapañcahṛdaye yogaprakaraṇam nāmāṣṭamam samāptam /

prapañcahṛdayam samāptam / śubham bhūyāt / (PH, p. 121, ll. 9-15)

5) 種々なる知識を生じ, 智者の心を魅する, 『プラパンチャ・フリダヤ』と称する, 実にプラパンチャによる最高の莊嚴, 全ての無知なる輩らに一切の事物に関する正しい知識をもたらす, 秘すべきこのタントラは, 輪廻の森を焼尽せるものなり

以上をもって, 『プラパンチャ・フリダヤ』に於ける「ヨーガ-章」と称する第8章が完了した。『プラパンチャ・フリダヤ』が完了した。幸福がありますように。

以上の i) ii) iii) から, PH を構成する全8章がさらに三つに大別されることが判る。即ち第1章——知識対象-プラパンチャについて(第1部)<sup>7)</sup>。第2-6章——知識-プラパンチャについて(第2部)。第7-8章——知識主体-プラパンチャについて(第3部)。従来の研究では主としてこの第2部 知識-プラパンチャの部分, 即ち第2-6章中の記述が任意に活用されてきたと言えよう<sup>8)</sup>。PH の著者がその部分を体系的に記述する際の基盤となるものが, 第2章中程に引用される(しかも第2章では唯一つの引用句である) 以下の如き詩節である。

vi) tad evābhyupagamyā bhagavatā manunā samānatayāṣṭādaśavidho vidyāprapañcaḥ pradarśitaḥ——

“āṅgāni vedās catvāro mimāṃsā nyāyavistarāḥ /

purāṇam dharmasāstraṃ ca vidyā hy etās caturdaśa //

āyurvedo dhanurvedo gāndharvo veda eva ca /

7) 「第1部」等の呼称は筆者が便宜上付したものの。

8) Cf. V. A. Ramaswami Sastri, *op. cit.*, p. 14, etc., V. Raghavan, *op. cit.*, p. 462, etc., M. Witzel, *op. cit.*, p. 213.

arthavedaś caturthaś ca vidyā hy aṣṭādaśa smṛtāḥ //”

iti / (PH, p. 21, 1. 19-p. 22, 1. 5)

この引用句に明らかな「ヴェーダの18学」のうち4ヴェーダ (Veda), 6 (ヴェーダ) 補助学 (Aṅga)<sup>10)</sup>, 4 (ヴェーダ) 副補助学 (Upāṅga)<sup>11)</sup>, 4 副ヴェーダ (Upaveda)<sup>12)</sup> が, 順次 PH の第2章, 第3章, 第4章, 第5章に於て簡潔に解説されているのである。そして最後の第6章では, 「全ての民の理想の窮極のものにして, あらゆる輪廻の苦の相続を止滅するものである解脱(mokṣa)<sup>13)</sup>」に関する8種の哲学学説<sup>14)</sup>が, 「六派-章」(Ṣaḍvarga-prakarāṇa)との章名のもとで説明されるのである。

以下暫し PH の組織的記述を支えるこの「ヴェーダの18学」を明確に記す引用句について検討して見よう。これはまた次節で展開される引用句を廻る考察の為の謂わば予備作業である。

vii) purāṇanyāyamīmāṃsādharmasāstrāṅgamiśritāḥ /

vedāḥ sthānāni vidyānām dharmasya ca caturdaśa // 3 // (YS, p. 2, ll. 24-25)

この *Yājñavalkyasmṛti* I-3 に現われるヴェーダ学 (vidyā-sthāna) の14分類法がより有名なものと言えるが, PH に見られる18分類法も必ずしも珍しいものではない<sup>15)</sup>。Mīmāṃsā 派の有名な学匠 Kumārila (AD. 7C) も *Tantravārttika* の中で次のように言っている。“parimitāny eva hi caturdaśāṣṭādaśa vā vidyāsthānāni dharmapramāṇatvena śiṣṭaiḥ pariḡḥitāni vedopavedāṅgāṣṭādaśadharmasamhitāpurāṇasāstraśikṣādaṇḍanītiṣamjñakāni, …”<sup>16)</sup>

9) Rg-veda, Yajur-v., Sāma-v., Atharva-v. の四種。Cf. PH, p. 19, etc.

10) Śikṣā, Vyākaraṇa, Nirukta, Chandas, Jyotis, Kalpa-sūtra の六種。Cf. PH, p. 22, etc.

11) Mīmāṃsā, Nyāya, Purāṇa, Dharma-sāstra の四種。Cf. PH, p. 23, etc.

12) Āyur-v., Dhanur-v., Gāndharva-v., Artha-v. の四種。Cf. PH, p. 23, etc.

13) Cf. PH, p. 60, ll. 2-3, etc.

14) Bṛhaspati-mata, Ārhata-m., Buddha-m., Akṣapāda-m., Kaṇāda-m., Kapila-m., Jaimini-m., Bādarāyaṇa-m. の八種。Cf. PH, p. 60, etc.

15) Cf., P. V. Kane, *History of Dharmaśāstra*, V-2, Poona, 1977 (2nd ed.), p. 820, n. 1337, etc., 宇井伯壽『印度哲學研究 第四』(東京 1982) p. 462ff, Subhadra Jha, tr., *History of Indian literature*, III-2, Delhi etc., 1967, p. 418, n. 2.

16) MD, ii, p. 122, ll. 3-5.

だが、こうした Kumārila の記述の典拠や PH の引用句の出典はどのような手続きを経て突き止めることが出来るのか。あらゆる書物を読破しそれらを完璧に記憶している者はいざ知らず、それならぬ者にとっては、ただ偶然の遭遇を頼む他ないのであろうか。なるほど、この場合には vi) 中、下線を付した “bhagavatā manunā” が一つの手掛かりにはなる。教養の乏しい者ならば、直ちにそれを有名な *Manusmṛti* と考えても不思議はない。MS の Ślokānukramaṇi などに当たってみるのも一つの手である。事実、近・現代の学者達の中にもそのように考えた者がいたようである。近年発表された “Mīmāṃsā in Ancient India”<sup>17)</sup> という論文の中で S. Sankaranarayanan は次のように伝えている。 “...T. R. Chintamani took this verse to be from the Manusmṛti and to be, consequently, the earliest reference to the Pūrva Mīmāṃsā. But, the scholar does not indicate where the verse occurs in the Smṛti. Nor do I find it in the editions of the Smṛti available to me”.<sup>18)</sup>

だが Chintamani も Chintamani なら、その誤り (?) を指摘する Sankaranarayanan も Sankaranarayanan である<sup>19)</sup>。おそらく、前者はこの PH の場合のように件んの詩節が Manu の名前と共に引かれているのを見て、直ちに有名な MS を思い浮かべ、これで事足れりとして迂闊にも MS の原典に当たるところを怠ったのであろう。後者は後者で件んの詩節が、Manu の名前と共に引用されている事例を知らなかったに相違ない。だが Sankaranarayanan の指摘を待つまでもなく、この「ヴェーダの18学」は、*Viṣṇupurāṇa* III-6-28~29 に現われるものとして一般には知られているのである<sup>20)</sup>。

viii) aṅgāni vedaś catvāro mīmāṃsā nyāyavistaraḥ /  
 purāṇaṃ dharmaśāstraṃ ca vidyā hy etāś caturdaśa // 28 //  
 āyurvedo dhanurvedo gāndharvaś caiva te trayaḥ /  
 arthaśāstraṃ caturthaṃ tu vidyā hy aṣṭādaśaiva // 29 //<sup>21)</sup>

17) ABORI, 62, 1981, pp. 1-15.

18) S. Sankaranarayanan, *op. cit.*, p. 13, ll. 22-26.

19) Cf. P. V. Kane, *op. cit.*, p. 1153, n. 1868.

20) 註 15) 参照。

21) VP' には “aṅgāni caturo (catvāro?) vedo mīmāṃsā nyāyavistaraḥ / purāṇaṃ dharmaśāstraṃ ca vidyā hy etāś caturdaśa // 28 // āyurvedo dhanurvedo gāndharvaś caiva te trayaḥ / arthaśāstra caturthaṃ tu vidyā hy aṣṭādaśaiva tāḥ // 29 //” (VP', i. p. 411, ll. 12-15) とある。現行 VP にも種々ヴァリエーションがあると見える。Cf. KK, p. 22, ll. 3-7, YS', p. 6, ll. 17-21

(VP, pa. 135, pr. 2, ll. 2-3)

vi) 中の引用とviii) を比較してみれば、前 2 行は全く一致し、後 2 行には若干の差違があるものの、ほぼ一致すると考えることが出来る。従って PH のこの引用句は一先ず VP よりのもとの見なし得るかも知れない。だがその若干の差違と、VP より引用を何枚 Manu の名前と共に行わなければならなかったかについての、それなりの説明が必要となる筈である。ところが、この「ヴェーダの18学」を端的に表現する 2 ヴェースは PH 以外の文献の中にも屢々引用されているのである。上引 TnV に対する Someśvara Bhaṭṭa (AD. 13C) の注釈 *Nyāyasudhā* 中にはこうある。

ix) purāṇanyāyamīmāṃsādharmasāstrāṅgamiśritāḥ /

vedāḥ sthānāni vidyānāṃ dharmasya ca caturddaśa //

iti smṛtyaiva caturddaśānām dharmmapramāṇatvam upapāditaṃ ca  
smṛtyadhikaraṇe atha /

āyurvedo dhanurvedo gāndharvaś ceti te trayāḥ /

arthaśāstraṃ caturtham ca vidyā hy aṣṭādaśaiva tu //

iti smṛtya…( NS, p. 183, ll. 16-22)

この引用されている二つのヴェースは前者が YS のもの、多少の差違を気にしなければ後者が VP のものと考えて差し支えあるまい。後者を知っているのなら、何故てっとり早く、VP の 2 ヴェースをそっくり引用しなかったのだろうか。だがこれは全くの愚問であろう。Kumārila の意図 (TnV 中の vā が表わしている) を明らかにしようとの有能な注釈者としては「ヴェーダの14学」と「ヴェーダの18学」を伝える二つの異なった典拠を示す必要があったと想像される。TnV の同一の箇所に対して別の注釈者 Śrī Bhavadeva (AD. 12C) は *Tautātita-matatilaka* 中でこう記している。

x) parimitāny eva hi dharmasāstrāni caturdaśavidyāsthānāni veda-  
vyavahāribhir manvādibhiḥ pariḡhītāni / tad uktam—

aṅgāni vedaś catvāro mīmāṃsānyāyavistaraḥ /

dharmasāstraṃ purāṇaṅ ca vidyā hy etāś caturdaśa //

iti // (TMT, p. 81, ll. 8-12)

「ヴェーダの14学」に対する典拠として、YS を引く Someśvara とは異なって VP のものと思われるもの（やはり、全く同じではない）を引用しているこ

と、Manu の名前が見えること等が特に興味深い。また R̥ṣiputra Parameśvara III (AD. 16C) の *Jaiminīyasūtrārthasaṅgraha* には以下の通りある。

xi) iha khalu sakalalokābhīṣṭapurusaṅgacatuṣṭayāvāptihetubhūtāni  
vedatadaṅgopāṅgopavedākhyāviśiṣṭāny aṣṭādaśa vidyāsthānāni  
manvādibhir upadiṣṭāni / yathāhuḥ——

aṅgāni vedaś catvāro mīmāṃsā nyāyavistarahaḥ /  
purāṇaṃ dharmasāstraṃ ca vidyā hy etās caturdaśa //  
āyurvedo dhanurvedo gāndharvo veda eva ca /  
arthavedaś ca sambhūya vidyā hy aṣṭādaśa smṛtāḥ //

(JSAS, p. 2, ll. 5-11)

ここでの引用句は、やはり基本的には VP のものと同じと言えるが、むしろ遙かに PH のものに近い。即ち、3 行目までは全く同じであり、4 行目も *caturthaś ca* が *ca sambhūya* となっている点を除けば全く同じである。しかも何よりも興味深く思われるのは、著者がこの場合にも PH, TMT の場合と同様この引用句を *Manu* と結び付けている点である。さらにまた PH と同様匿名の作品であり、PH の第 6 章とほぼ同性格の「学説綱要書」*Sarvamataśaṅgraha* にも似たものが引用されている。

xii) tathā ca śrīvāyaviye——

“aṅgāni vedaś catvāro mīmāṃsā nyāyavistarahaḥ /  
purāṇaṃ dharmasāstraṃ ca vidyā hy etās caturdaśa //  
āyurvedo dhanurvedo gāndharvaś cety anukramāt /  
arthaśāstraṃ paraṃ tasmād vidyās tv aṣṭādaśa smṛtāḥ //  
aṣṭādaśānām etāsāṃ vidyānām bhinnavartmanām /  
ādikarttā kaviḥ sākṣac chūlapāṇir iti śrutih //  
sa hi sarvajagannāthaḥ sirsṅkṣur akhilaṃ jagat /  
brahmānaṃ vidadhe sākṣāt putram agre sanātanam //  
tasmai prathamaputrāya brahmaṇe viśvayonaye /  
vidyāś cemā dadau pūrvaṃ viśvasthityartham īśvaraḥ //”

iti / (SMS, p. 12, ll. 6-17)

ここでは次の諸点が確認出来るだろう。PH, JSAS に引用される (NS, TMT に引用される) 問題の 2 ヴァースに対してさらに別のヴァリエーションが存在す

ること、及びその 2 ヴァースに続く 3 ヴァースが現行 VP には見出されないことから、この SMS の引用が VP とは別の典籍からのものと推定されること、しかもそれは Śrīvāyavīya と呼ばれる書物であることがである。この著作は通常我々が Vāyupurāna の名前で知っているものだろうか。VaP 61-78~79 には以下の如くある。

xiii) aṅgāni vedaś catvāro mīmāṃsā nyāyavistarahaḥ /  
 dharmasāstraṃ purāṇaṃ ca vidyās tv etāś caturdaśa // 78 //  
 āyurvedo dhanurvedo gāndharvaś caiva te trayahaḥ /  
 arthasāstraṃ caturthaṃ<sup>22)</sup> tu vidyās tv aṣṭādaśaiva tu // 79 //

(VaP, p. 212, ll. 29-30)

成るほど、こうして見ると VP, VaP の問題の 2 ヴァース自体殆ど同じと言ってもよい。僅かに第 2 行目と第 4 行目に差違らしきものが窺えるが、それは、両者を截然と分かつものと言えるだろうか<sup>23)</sup>。強いて言うならば、先の NS の 2 行と TMT の 2 行は VP からのものではなく、どうやら VaP からのものであって、PH と JSAS のものは、VP からのものと言えるかも知れない。また、SMS のものは、第 2 行目の特徴から考えて、VaP よりは、むしろ VP からのものと言えそうだが、それも明確にならない。第 3 ヴァース以下のものは、少なくとも VaP 61-78~79 に後続する部分には見出されない。従って SMS の場合は、VaP とは別の著作か、若しくは現行 VaP とは別のバージョンからのものと考えべきかも知れない。以上に見たところからも、ある著作中の引用句の出典を確定することが困難な作業であるという一般的事実と共に、この PH の引用句の出典探し（無論本稿の目的ではないが）がなかなか容易な作業ではないことが予想されるであろう。その上 PH に於いては、引用に際して SMS に於けるような【作品名 (locative) + 引用句】というスタイルを取っていないようなのである。次節では、PH に見られる数ある引用句をもう少し別の角度からもう少し組織的に検討してみたい。

22) 刊本には caturthas との異読が挙げられている。

23) 第 4 行目はともかく、第 2 行目に関してはそうとも言えないようである。Cf. KK, p. 22, 1. 5.

III *Prapañcahṛdaya* の引用句及び制作年代

PH に於ては事実【作品名 (locative) + 引用句】というスタイルは全く取られていない。しかも【著者名 + 引用句】とのスタイルも全く稀である。その上、引用と地の部分の境目が必ずしも明確ではなく、従って例えば A. Parpola が、“……how liberal the authors at this period were in handling quotations.”<sup>24)</sup> と言ったような事情はこの PH の場合にも大いに妥当するもののようにである。その結果ここでの検討は、明らかに引用と思われるものに限って行われるに過ぎない（编者 T. G. Sāstrī によつては、引用は原則として引用符 “ ” で示されている。筆者は殆どそれに従った。また、後で述べるように编者によつては数例を除いて、出典は全く指摘されていない）。先ずは PH に於ける引用のスタイルを全篇にわたつて眺めてみよう。出典の割り出しに関連すると思われる語には下線を付す。また引用句を意味する --- の右肩の小数字は、その詩節の概数である。何も付いていないものはそれが 1 であることを意味する。さらに引用部分の左右の頁数はそれぞれ刊本に於ける始まりと終わりの箇所を示す。右に何も無いものは、始まりと同一の頁でその引用が完了することを意味する。

- Ch. 1 Q. 1 p. 1 tad eva pratijñātaṃ sāṅkhyena --- iti  
 Q. 2 p. 4 tad uktaṃ --- iti  
 Q. 3 p. 7 tad uktaṃ --- iti  
 Q. 4 p. 7 tatra……pradarśitaṃ --- iti  
 Q. 5 p. 7 tad……pradarśitaṃ --- iti p. 8  
 Q. 6 p. 8 tad uktaṃ ---<sup>2</sup> iti  
 Q. 7 p. 8 tad uktaṃ --- iti p. 9  
 Q. 8 p. 9 tad api pradarśitaṃ ---<sup>2</sup> iti  
 Q. 9 p. 10 tad uktaṃ ---<sup>3</sup> iti  
 Q. 10 p. 11 tad uktaṃ --- iti p. 12  
 Q. 11 p. 12 tatra……pradarśitaṃ --- iti  
 Q. 12 p. 14 tad uktaṃ ---<sup>4</sup> iti  
 Q. 13 p. 16 tad uktaṃ bhagavatā --- iti

24) A. Parpola, “On the formation of the Mīmāṃsā and the problems concerning Jaimini” (WZKS, Bd. 25, 1981, pp. 145-177), p. 169, ll. 7-8.

(46)

*Prapañcahṛdaya* 試論 (金 沢)

Q. 14 p. 17 tad uktam bhagavatā ---<sup>2</sup> iti

---

Ch. 2 Q. 15 p. 21 tad evābhyupagamyā bhagavatā manunā.....pradarśi-  
taḥ ---<sup>2</sup> iti p. 22

---

Ch. 3 Q. 16 p. 25 tad eva pratijñātam brahmaṇā ---<sup>2</sup> iti

Q. 17 p. 26 tad kāraṇam api bhagavatā pradarśitam --- iti

Q. 18 p. 26 tad uktam bhagavatā pāṇininā --- iti

Q. 19 p. 26 tathānyair api --- iti p. 27

Q. 20 p. 27 .....pāṇinisamjñayā pradarśyate / tatra saṃhitā ---  
iti pradarśitā

Q. 21 p. 30 tad eva pradarśitam --- iti

Q. 22 p. 30 tatra.....pradarśitāḥ / te --- iti

Q. 23 p. 35 --- iti vidhānād.....

---

Ch. 4 Q. 24 p. 45 tad eva tatra pratijñātam --- iti

---

Ch. 5 Q. 25 p. 52 tathā vāhaṭena --- iti pratijñāya, --- ity ādy aṣṭa-  
sahasraślokair ārogyakaraṇam samyag eva pradarśi-  
tam iti

Q. 26 p. 55 te ca pradarśitāḥ ---<sup>2</sup> iti

Q. 27 p. 58 tad uktam --- iti / sa rājā saptaprakṛtiḥ ---<sup>2</sup> iti

---

Ch. 6 Q. 28 p. 62 tad eva pratijñātam buddhamuninā --- iti

---

Ch. 7 Q. 29 p. 70 jñānarūpam ucyate ---<sup>2</sup>

Q. 30 p. 70 --- ity etad sarvaṃ jñānam iti kathyate /

Q. 31 p. 70 ---<sup>2</sup> p. 71

Q. 32 p. 71 ---<sup>6</sup> iti.....iti bhagavatā vāsudevenoktam /

Q. 33 p. 71 anyair api --- p. 72

Q. 34 p. 72 tathā sāṅkhye --- iti

Q. 35 p. 72 anyac ca --- iti śrutiḥ /

Q. 36 p. 72 tathānyad api ---<sup>4</sup>

Q. 37 p. 72 etad evārtham brahmaṇoktam ---<sup>4</sup> p. 73

- Q. 38 p. 73 tathā ca śrutih --- / ---<sup>2</sup> ity ādi /  
 Q. 39 p. 73 ---<sup>31</sup> p. 76  
 Q. 40 p. 76 uktaṃ ca bhagavatā nārāyaṇena ---<sup>2</sup> iti  
 Q. 41 p. 76 uktaṃ ca bhagavatā skandena --- iti  
 Q. 42 p. 76 anyac ca ---  
 Q. 43 p. 77 --- iti……veditavyāḥ /  
 Q. 44 p. 81 anyac ca ---<sup>7</sup>  
 Q. 45 p. 81 asminn arthe śrutir api --- ity ādi /  
 Q. 46 p. 81 ---<sup>11</sup> iti / p. 82  
 Q. 47 p. 82 anyad apy ucyate…… ---<sup>14</sup> ? p. 84
- 
- Ch. 8 Q. 48 p. 84 tad uktaṃ ---<sup>4</sup> iti p. 85  
 Q. 49 p. 85 --- ity uktaṃ /  
 Q. 50 p. 85 ---<sup>7</sup> p. 86  
 Q. 51 p. 86 uktaṃ ca ---<sup>5</sup> iti /  
 Q. 52 p. 87 ---  
 Q. 53 p. 87 ---<sup>9</sup> p. 88  
 Q. 54 p. 88 ---<sup>5</sup> evam uktaṃ……p. 89  
 Q. 55 p. 89 ---  
 Q. 56 p. 90 ---<sup>34</sup> ? p. 93  
 Q. 57 p. 93 atha yogasya prayogaṃ vakṣye ---<sup>201</sup> ? p. 111  
 Q. 58 p. 112 uktaṃ ca --- iti  
 Q. 59 p. 112 uktaṃ ca ---  
 Q. 60 p. 112 anyad api ---  
 Q. 61 p. 113 anyac ca ---<sup>55</sup> ? p. 118  
 Q. 62 p. 118 asminn arthe māṇḍūkyopaniṣat ---  
 Q. 63 p. 118 sucolopaniṣat ---<sup>12</sup> p. 119  
 Q. 64 p. 119 ……kathyante ---<sup>5</sup> iti p. 120

以上によってさらに判明することは、この PH においては直ちに出典名を特定できないものがほとんどであるということであろう。つまり現代風な言い方をすれば、著者によっては出典名が明記されていないということである。数少ない

例外は Q. 62 と 63 である。即ち *Māṇḍūkya-upaniṣad* と *Sucola-upaniṣad* である。但し前者に関しては編者 T. G. Sāstri が珍しくコメントを付している。つまり “vākyaṃ idaṃ māṇḍūkye nāsti, muṇḍakopaniṣadi tu dṛśyate.”<sup>25)</sup> そして事実 Sāstri の指摘の通り、現行 MU にはなく、*Muṇḍaka-upaniṣad* に於て見られる<sup>26)</sup>のである。これをどう説明すればよいのか。その文を含む現行 MU とは別のバージョンの存在を想定するべきか。それとも、PH の著者のいろいろな性格に帰すべきか。また、*Sucola-upaniṣad* について浅学の故に筆者は全く知るところはない。この他に比較的容易に出典名とその箇所を割り出せそうなものは、Q. 1 と Q. 34 であるが、それは *Sāṃkhya-kārikā* からの引用<sup>27)</sup>であると知れる。また、編者によってさすがに割註でスートラ番号までが付された Q. 18 と Q. 20 の所謂 *Pāṇinisūtra* の場合である<sup>28)</sup>。さらに、Q. 25<sup>29)</sup> と Q. 28<sup>30)</sup> も時間をかけて丹念に調べさえすれば、出典を割り出せるかも知れない。後は個々の文献等（種々索引を含む）に於ての、全くの偶然の遭遇に頼る他ないわけであるが、筆者はこれらのうち特に bhagavat という語に注目したい。これら PH 全篇中少なからず現われる bhagavat という語の意味するところは定かではないが、取敢えず “Reverend, venerable, divine, holy (an epithet applied to gods, demigods and other holy or respectable personage)”<sup>31)</sup>程の意味にとっておこう。つまり、この PH の匿名の著者の個性をその語を手掛かりに探ってみようということである。上記のもの以外にも PH 全篇中にはこの bhagavat の用例が幾つか見つかる。それらを整理すると次のようになる。

25) PH, p. 118, f. n.

26) MuU II-2-4.

27) SK-52 & 3.

28) PaS I-2-27 & I-4-109.

29) “kāyabālagrahordhvāṅgaśalyadamṣṭrājarāvṛṣāḥ / aṣṭāv aṅgāni tasyāhuś cikitsā yeṣu saṃśritā //” (PH, p. 52, ll. 11-12), “bhiṣag dravyāṅy upasthātā rogī pādacatuṣṭayam / cikitsitasya nirdiṣṭaṃ pratyekaṃ tac caturvidham //” (PH, p. 52, ll. 14-15).

30) “utpādasthitibhaṅgadoṣarahitāṃ sarvāgamonmūliniṃ grāhotsargaviyogayo-gajanitāṃ nābhāvabhāvānvitāṃ / tāṃ antardvayavarjitāṃ nirupamāṃ ākāśavan nirmalāṃ prajñāpāramitāṃ janasya jananiṃ śṛṅvantu bodhyarthinaḥ //” (PH, p. 62, ll. 14-17)

31) Prin. V. S. Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary* (Revised & Enlarged Ed.), Kyoto, 1978, p. 1180.

イ) bhagavatā	3 例 (p. 16, 17, 26)	Q. 13, 14, 17
ロ) bhagavatā <u>Manunā</u>	1 例 (p. 21)	Q. 15
ハ) bhagavatā <u>Paṇinīnā</u>	1 例 (p. 26)	Q. 18 (Cf. Q. 20)
ニ) bhagavatā <u>Vāsudevena</u>	1 例 (p. 71)	Q. 32
ホ) bhagavatā <u>Nārāyaṇena</u>	1 例 (p. 76)	Q. 40
ヘ) bhagavatā <u>Skandena</u>	1 例 (p. 76)	Q. 41
ト) bhagavatā <u>Vyāsanāmnā</u>	1 例 (p. 19)	
チ) <u>Bādarāyaṇo</u> bhagavān <u>Vyāsas</u>	1 例 (p. 67)	
リ) bhagavatī <u>Gaṅgā</u>	1 例 (p. 9)	
ヌ) bhagavatpāda	1 例 (p. 39)	
ル) Bhāgavatam (=BhP)	2 例 (p. 46)	

引用句と共にその名前が上がっている Manu, Pāṇini, Vāsudeva, Nārāyaṇa, Skanda はインドの歴史上の文献中に於て孰れも極めて馴染み深いものであり、Pāṇini を除くと必ずしも特定の著作と結び付かない。因みにト) は Veda の編者としての Vyāsa であり、チ) は ヴェーダーンタ派の開祖 Bādarāyaṇa = Vyāsa である。リ) は周知の Gaṅgā 女 (神) であり、ル) は 18 プラーナの一つ、*Bhāgavatapurāṇa* のことである。ヌ) の Bhagavatpāda<sup>32)</sup> と呼ばれる人物は *Brahmasūtra* に対する注釈者とされている。引用句と直接関わるイ) からヘ) のうち、ロ) については前節で一応の検討済みであり、ハ) は Gaṇapati Sāstri によっても既に典拠が示されていた。残るは、イ) とニ) とホ) とヘ) である。中でもとりわけ興味深く思われるのは、著者によって単に bhagavat と名指される人物 (or 神格)、及びそれによって意味されている著作ではないだろうか。この PH の著者にとって、名前を出すのがはばかれる程に関わりの深い、しかもやんごとなき存在、それこそがこの bhagavat には籠められているように思われる。つまり、匿名であるこの PH の著者の個性を最も端的に表わすものが、この bhagavat で意味されているのではないかと思われたのである。だが、前節での考察からも想像されるように、引用句と共にある人的形象は、どうやら引用句の出典の作者を単純には意味しないらしいという点を顧慮しつつ、こうした考

32) Cf. P. Hacker, "Śaṅkarācārya and Śaṅkarabhagavatpāda: Preliminary remarks concerning the authorship problem", *P. Hacker Kleine Schriften*, Wiesbaden, 1978, pp. 41-58.

察を如何様に加えたとしても、出典を探り当てることは今のところはやはり全くの偶然によるものである。幸い筆者は上記ニ)とホ)で導かれる6 ヴァースと2 ヴァースの計8 ヴァースを全て *Bhagavadgītā* の中に見つけることができた<sup>33)</sup>。そしてさらに問題の bhagavat によって導かれるイ)の計4 ヴァースの出典と思われるものに行き当たった<sup>34)</sup>。今日 *Prapañcasāra* (or *Prapañcasāratantra*) の名前で知られているものがそれである。*Prapañcahṛdaya* と *Prapañcasāra*, 共に “essence” と訳し得る sāra と hṛdaya という語をそれぞれ含む全く似通った名前を持つ二つの著作が、これまでなにか関係があると指摘されたことは全くなかったようである。さらにそれに励まされて、PS の刊本に付された Ślo-kānukramaṇikā 等を頼りに調査した結果、上記 Q. 12 の tad uktam によって導かれる4 ヴァースのうち後3 ヴァース(厳密には2 ヴァース半)もまた、現行 PS のうちにほぼ同じ形で見出された<sup>35)</sup>。また、PH 第1章には引用ではないものの、現行 PS の詩節を自由にパラフレーズしたと思われる箇所も少からず見出された<sup>36)</sup>。タイトルの類似は単なる偶然のものではなく、PH の著者がはっきりと PS を知っており、PH の述作に際してそれを大いに活用したと言えるであろう。換言すれば PS を権威として(単なる bhagavat の証言として)引用しても何ら支障のない環境の中で、問題の PH が書き著わされた(編纂された)ということである。この PS との関わりは、単に PH という匿名の書物の性格づけに役立つばかりでなく、本稿で次に問題としようとするその成立年代の上限を定める一つの資料となるように思われる。

ところでこのPSとは如何なる書物であるのか<sup>37)</sup>。本稿はそれに深く立ち入る場ではないため、その概略を示すに留める。PSとは、あの Arthur Avalon (=Sir John Woodroffe) の編集になる Tantrik Texts にも収められ、また、Śaṅkara の作品集の中にも収められるという、ある意味では特異な作品である。つまり、伝統的には、BrS に対する注釈者として有名なあの Śaṅkara に帰されることも

33) BG XIII-28~34, BG V-10 & IX-30. この他 BG からの引用は第7章に頻出する。Q. 29, Q. 30, Q. 31, Q. 43. また Q. 46 の一部。

34) PS II-45 & PS II-43~44 & PS III-60.

35) PS I-89cd~91cd.

36) 比較対照は略す。

37) PS については Teun Goudriaan & Sanjukta Gupta, *Hindu Tantric and Śākta literature* (A History of Indian Literature II-2), Wiesbaden, 1981, pp.131-134 に詳しい。以下の概略は、主としてこれに拠る。

ある作品ということである。だが、著者の名前が隠されていないことから“Original Tantras”ではないものの、数ある“Digests of Mantraśāstra”の一つに数えられていることから容易に想像されるように、この PS が Śaṅkara の真作であることには全く疑念が寄せられており、従ってその成立年代も明確ではないのである。J. N. Farquhar によってほぼ AD. 10 世紀頃の成立だろうとされている<sup>38)</sup>。だが、信頼し得る校訂テキストの乏しいタントラ文献のうち最も模範的なテキスト出版と評価される<sup>39)</sup> *Nityāśoḍaśikārṇava* の編者 Vrajavallabha Dviveda によっては、AD. 11 世紀後半以前の成立とされているところのものである<sup>40)</sup>。PH が、仮りに、PS がそのタイトルを負っているかもしれないオリジナルのタントラからではなく、この PS 自体を前提にし、かつそこから引用を行っていることが事実だとしたら、そのことは PH の成立年代を推定する際に大きな意味を持ってきはしないだろうか。逆に PH の制作年代を確定出来、しかもそれが、AD. 11 世紀後半以前であるとしたら、今のところ、この重要なタントラ文献に言及し、しかも引用する最も早期の文献ということになる。以下にはこの点を踏まえた上で、これまでの PH の制作年代の推定の経緯を再検討してみたい。だが、その前に PH がその中で言及している人物名を一瞥しておくのも無駄ではあるまい。PH の場合総じて言えることは、そうした人物名の言及が主として第 2 部に集中していることであり、また挙げられている名前に一種の偏りが見られるということである。前述した bhagavat と共に表れるものの他、Kalpa-sūtra に関わる Āśvalāyana, Bodhāyana, Jaimini, Agastya, Āpastamba, Vādhūlaka, さらに、Mīmāṃsā に関わる Jaimini, Vyāsa, Bodhāyana, Upavarṣa, Devasvāmin, Bhavadāsa, Śabarāsvāmin, Saṃkarṣa (or Saṃkarṣaṇa), Bhagavatpāda, Brahmādatta, Bhāskara, Bhaṭṭa=Bhaṭṭakumāra, Prabhāskara さらに、Akṣapāda, Nārada, Vālmiki, Vāhaṭa, Viśvāmitra, Bṛhaspati, (Ārhata), Buddha=Buddhamuni, Kanāda, Kapila, Nārāyaṇa がその全てである<sup>41)</sup>。孰れも他の文献中極普通に現われる有名なものばかりである。

38) Cf. J. N. Farquhar, *An outline of the religious literature of India*, Delhi etc., 1967 (1st Indian Reprint), p. 266, T. Goudriaan & S. Gupta, *op. cit.*, p. 131, ll. 29-30.

39) Cf. T. Goudriaan & S. Gupta, *op. cit.*, p. 3, ll. 18-20.

40) Cf. NiS, Upodghāṭaḥ, p. 41, T. Goudriaan & S. Gupta, *op. cit.*, p. 131, ll. 30-33.

41) PH に於ける一々の箇所は略す。Cf. PH, p. 33, 39, 42, 47, 54, 60, 84.

Mimāṃsā に関わる人物名だけが、丁寧に列挙されている点に注意をする必要がある。この点は、PH の匿名の著者の個性を想像する縁となるものであろうが、本稿冒頭において触れたように、この PH がこれまで Mimāṃsā の歴史的研究に於て最もよく利用されてきたということとも関わるものである。PH の成立年代の推定の為には、PH が言及している必ずしも多いとは言えない人物達のうち、誰が最も後代の者であるかということが問題となってくるのである。

さて、Aufrecht によって modern work と位置付けられた PH は、今日では大方 AD. 11 世紀頃の作品と信じられている<sup>42)</sup>。それに与って力あった人物は、S. K. Aiyangar であろう。その主著 *Manimekhalai in its historical setting*<sup>43)</sup> (1928) は残念ながら筆者未見であるが、PH の制作年代の推定の為になされた Aiyangar の作業は、氏の “Viṃśaty-Adhyāya-Nibaddham Mimāṃsā-Śāstram”<sup>44)</sup> (1940) から窺うことが出来る。その大綱を以下に示そう<sup>45)</sup>。Aiyangar は先ず PH が匿名の作品であり作者不詳であるという事実を確認した後、PH が伝える「Mimāṃsā は、20 章 (viṃśaty-adhyāya) からなる単一の学問である」事実に注目する。そして、別に発見されている AD. 999 年に比定される銘文 (inscription) にも、その旨が記されていることから、PH の制作時期もその銘文の AD. 999 年とはさほど隔たったものではない(後のものではない) だろうと推定する。また氏は、PH に Brahma-Kāṇḍa (=BrS) の注釈者として挙げられている Bhagavatpāda を Śaṅkara であるとは考え難く、むしろその師 (Guru) たる、Govinda であろうと推定する。従って、PH の作者はほぼ Śaṅkara の同時代 (or さほど隔たらない時代) の者である。また、PH には、今日 Saṅkarṣa-Kāṇḍa<sup>46)</sup> に対する現存最古の注釈書の作者として知られる Devasvāmin についての言及がある。Devasvāmin の生存年代は AD. 1000 年頃である。以上がその論文中で Aiyangar によって指摘された PH の制作年代を推定するために役立つと思われる諸点である。Aiyangar によっては、PH

42) Cf. A. Parpola, *op. cit.*, p. 146, n. 4, etc.

43) London, 1928.

44) *Woolner Commemoration Volume*, ed. by M. Shafi, Lahore, 1940, pp. 1-6. なおこの論文は本学の吉津宜英、大西龍峯両先生の御蔭をもって参照するを得た。記して甚深の謝意を表す。

45) Cf. S. K. Aiyangar, *op. cit.*, p. 2, 3, & 5.

46) Saṅkarṣa-kāṇḍa との関わりについては、拙稿「Saṅkarṣa-kāṇḍa をめぐる諸問題」『東洋學報』67-3・4 (昭和61年3月) を参照。

の成立年代が AD. 11 世紀頃であるとは明言されていない。従ってこれをどう解するか、ということが後続する者に託されているのであるが、例えば Damodar Vishnu Garge は、Mīmāṃsā の歴史的・研究史上画期的な価値を有する *Citations in Śābara-Bhāṣya*<sup>47)</sup> (1952) の Introduction の中で次のように言う。“Prapañcahṛdaya, a late work of an unknown author (which according to S. K. Aiyangar<sup>5</sup> belongs probably to the tenth century A. D.), ……”<sup>48)</sup> そして n.5 として上記 Aiyangar 論文を明示している。また、上記 Aiyangar の著作を踏まえている S. S. Suryanarayana は、“The inference is possible that the *Prapañcahṛdaya* was compiled before Rāmānuja’s time”<sup>49)</sup> と指摘している (1930)。さらにまた、V. M. Ramaswami Sastri は今日最も有名な Mīmāṃsā の通史研究<sup>50)</sup> (1936) の中、Devasvāmin の項で “……in any case he (=Devasvāmin: 筆者註) can not be later than A. D. 1050, since he is mentioned in the *Prapañcahṛdaya*, a work which can well be assigned to the 11th century, if not earlier.”<sup>51)</sup> と記している。以上の点を総合すると、PH の制作年代の推定に關与するものとして、

- ① AD. 10 世紀の近傍である。
- ② PH で言及される Bhagavatpāda は誰か？
- ③ PH で言及される Devasvāmin の生存年代は？
- ④ PH で言及されない Rāmānuja との前後関係は？

という四点に整理することが出来る。先ず①は問題あるまい。「近傍」は絞り込みとは結び付かないからである。②の Bhagavatpāda は、通常 Śaṅkara (AD. 700–750頃<sup>52)</sup>) の師 Govinda (AD. 670–720頃) の呼称として知られている。だが、Śaṅkara を指して用いられることもある。③の Devasvāmin は、*Āśvalāyana-Grhya-Sūtra-Bhāṣya* の作者 Devasvāmin と同一であるか否かが問題

47) DCDS 8, Poona, 1952.

48) *ibid.*, p. 4, ll. 25–26.

49) S. S. Suryanarayana Sastri, *The Śivādvaita of Śrikanṭha*, Madras, 1972 (1st ed., 1930), p. 12, n. 17.

50) V. M. Ramaswami Sastri, *op. cit.*

51) *ibid.*, p. 59, ll. 12–15.

52) 以下の生存年代は、主として前田専学『ヴェーダーンタの哲学』京都 1980 に拠った。

となる。同一とすれば、AD.11 世紀頃になる<sup>53)</sup>。④の Rāmānuja は AD.1017-1137 (or 1056-1137) として知られている。この内、④の Rāmānuja との前後関係を明確に出来るとすれば、PH の年代の絞り込みにとって有益である。それを以下に検討しよう。

xiv) brahmakāṇḍasya BhagavatpādaBrahmadattaBhāskarādibhir mata-  
bhedenāpi kṛtam / (PH, p. 39, ll. 11-12)

ここに見られる Brahma-Kāṇḍa (=BrS) に対する注釈者を列挙する中に Rāmānuja の名前がないことが、PH を Rāmānuja 以前とすることの一つの根拠となっている。Bhagavatpāda, Brahmadatta, Bhāskara 等の「等」の内に *Śrī-Bhāṣya* の作者 Rāmānuja の名前が顧慮されている可能性はある。また、Bhagavatpāda が Śaṅkara である可能性はある。その推定の根拠として SMS の一節を見てみたい。

xv) asyā bhāṣyakāraḥ Śaṅkarabhagavatpādaḥ / tedekeśīnāś ca  
BrahmadattaBhāskaraRāmānujaĀnandatīrthādayo matabhedena  
tadbhāṣyābhāsān racyāñ cakruḥ / (SMS, p. 10, 1. 23-p. 11, 1. 2)

筆者にはこの SMS の記述が、xiv) の PH の記述を踏まえたものと考えてよいと思われるが、如何であろうか<sup>54)</sup>。Bhagavatpāda—Śaṅkarabhagavatpāda, Brahmadatta—Brahmadatta, Bhāskara—Bhāskara, ādi—Rāmānuja-Ānandatīrtha-ādi。少なくとも SMS の著者にとって、PH の Bhagavatpāda は、Śaṅkara と考えられたのであり、PH の ādi を開くとすれば、Rāmānuja, Ānandatīrtha (=Madhva, AD. 1197-1276) 等と考えられたのである。だが、ここで SMS の著者によって Rāmānuja と Ānandatīrtha の二人が追加されていることは、端的に PH と SMS の成立年代の隔たりを示すものであろうが、筆者は少なくとも、Rāmānuja を PH の ādi の中に読みこみたいと思う。つまり、PH の著者は Rāmānuja を知っていた、だが比類ない名声に包まれた過去の人

53) Devasvāmin, 及びその年代については問題がある。Cf. Richard W. Lariviere, “Madhyamamimāṃsā—The Saṅkarśakāṇḍa” (WZKS, Bd. 25, 1981, pp.179-194), pp.188-190, Paramesvara K. Aithal, “Devasvāmin: A forgotten jurist?”, *Indology and law: Studies in honour of Prof. J. Duncan M. Derrett*, Wiesbaden, 1982, pp.106-119.

54) この他に例えば PH, p. 39, 1. 11 と SMS, p. 10, ll. 13-14, PH, p. 41, 1. 18-p. 42, 1. 3 と SMS, p. 10, ll. 15-21 を比較せよ。

物としてではなしに、同時代人としてである。また、PH が、BrS に対する注釈者としての Śaṅkara に触れていないということは考え難い。SMS の作者のように、Bhagavatpāda で Śaṅkara を指していたであろうことは、間違いないところである。さらにまた、その場合には、Bhagavatpāda→Brahmadatta→Bhāskara との列挙が年代順になっている筈だ<sup>55)</sup> (Brahmadatta (AD. 600-700)→Bhagavatpāda (=Śaṅkara)→Bhāskara となるべきだ) との疑念を挟む余地もあるかも知れない。これにしても SMS のように、Śaṅkara と他の二人を系統を異にする者と解すれば問題ないように思われる。以上を総合すると、PH は Rāmānuja の同時代 (or 少し後) の人物によって著わされた、と言い得るのではないか。これまでの PH の制作年代の推定の為になされた議論は、必ずしも全てが適当であったとは言えない。だが、その結果採用された AD. 11 世紀頃という年代は概ね信頼し得るものであったと言えよう。さらに厳格を期すならば、PH の成立は、AD. 11-12 世紀頃としておくのが良いかもしれない<sup>56)</sup>。そこを基点に Saṅkarṣa-Kāṇḍa の注釈者 Devasvāmin の生存年代の下限も推し測れるというものである。PH によっては、bhagavat の言として現行 PS 中の詩節が引かれていた。また、PH の別の箇所では、Bhagavatpāda という語で、Śaṅkara が意味されていたらしい。とすれば、例えば後代、“ata eva śrī-Śaṅkarabhagavatpādānām tantrānusāriprapañcasāranāmakanibandhanirmāṇam api sādhu saṃgacchate /”<sup>57)</sup> と記される PS が、PH の作者によってもまた、そのように考えられていたと見なし得るだろうか。おそらく否である。同一の書物の中で同一の人物を指すのに Bhagavat, Bhagavatpāda との二通りの呼称を用いるとは考えにくいことである。PH が成立を見た環境の中では、PS が Śaṅkara の作とはされていなかったということであろう。また、現行 PS 中の詩節を引用するに当たってその作品名が言及されていなかったにしても、*Īśānaśivagurupaddhati* (AD. 11C 後半) 中に、PS との作品名と共に現行 PS 中の詩節が引かれている事実<sup>58)</sup>と照らし合わせたならば、PH の作者によってもまた PS との名前の著作が問題とされていたと推定し得るように思われる

55) 中村元『ヴェーダーンタ哲學の發展』東京 1981 (一刷 1955) p.6 を参照。

56) Rāmānuja の生存年代が限定されない限り、PH の成立年代も十分に絞り込めないかも知れない。

57) PKSV, p. 14, ll. 12-13.

58) Cf. NiS, Upodghāṭaḥ, p. 41, 1. 7f.

のである。

《略号》

BG: Bhagavadgītā (HOS 38, 1946)

BrS: Brahmasūtra

CC: Catalogus Catalogorum (T. Aufrecht)

JSAS: Jaiminiyasūtrārthasaṅgraha (TSS 156, 1951)

KK: Kṛtyakalpataru (GOS 106, 1948)

MD: Mimāṃsādarśana (AnSS 97, 1970–1975, 7pts)

MS: Manusmṛti

MU: Māṇḍūkya-upaniṣad

MuU: Muṇḍaka-upaniṣad (Radha. PU, 1974, 4th ed.)

NiS; Nityāṣoḍaśikārṇava (YTG 1, 1985, 2nd ed.)

NS: Nyāyasudhā (ChSS 14, 1902–1909)

PaS: Pāṇinisūtra

PH: Prapañcahṛdaya (TSS 45, 1915)

PKSV: Paraśurāmakalpasūtra-vṛtti (GOS 22, 1979)

PS: Prapañcasāra (Delhi etc., 1981, reprint ed.)

SK: Sāṃkhyakārikā

SMS: Sarvamatasāṅgraha (TSS 62, 1918)

TMT: Tautātītamatatilaka (POWSBT 79, 1939–1944)

TnV: Tantravārttika—→MD

VaP: Vāyupurāṇa (AnSS 49, 1905)

VP: Viṣṇupurāṇa (Venkateśvara ed., unbound leaves) (VP': N. P. S 38, 1980, 2vols)

YS: Yājñavalkyasmṛti (Bombay, 1949, 5th ed.) (YS': AnSS 46, 1903–1904, 2pts)

〔付記〕 本稿 381頁脚注 46) の拙稿「Saṅkarṣa-kāṇḍa をめぐる諸問題」中の誤植を訂正する。

p. 347, l. 25: evādhyar→evābhyar-

p. 344, l. 19: i) と ii) → i) と iii)

p. 341, l. 15: AD. 10 → AD. 5

ご指摘いただいた吉水清孝氏に衷心より感謝する。